

プレアデスのおもちや

Momochoco

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私達が創られたとき、あなたは誰よりも喜んでいましたね

あなたはナザリツクへ帰還するたびに、私達の様子を見に来てくれました

私達はあなたと出会えて幸せでした

「あの日」までは

愚かにもアインズ様に反逆し敗れ、地位も力も奪われた無力なあなた

大切なおもちゃはしまっておきましょう

失くさないように。手放さないように

5 / 30 誤字報告ありがとうございました

目次

水曜日	殴打のち首締め	1
水曜日	噛み跡のち嫉妬	8
木曜日	捕食のち蹴り	18
木曜日	ドロドロのち水責め	26
金曜日	嘔吐のち膝枕	36

水曜日 殴打のち首締め

灰色の空の下、一人の青年が冷たい路地裏を走り抜ける。

顔には汚染された空気を防ぐための仰々しいマスク付けて、左手には仕事用のカバンを引つ提げて走っている。

路地裏を抜けると、人の気配がしない裏道に出る。今が夜中ということもあり、時間が止まったように静まり返っていた。聞こえるのは靴が地面をたたく足音だけだった。この道が男の住むマンションまでの一番の近道だった。

歩いていくうちに目的地のマンションまで到着する。

自分の名前が書かれた郵便受けをパパッと確認すると、郵便物を右手でしっかりと持ち、エレベーターに乗る。自分の家にやっと帰ってこられたことに安心したのか、無意識のうちに安堵のため息が漏れる。

「よし、これなら何とかログインに間に合うな」

エレベーターが目的の階に到着したことを告げ、歩き出す。自分の部屋の前に着き鍵を開ける。明かりを点けると、今朝に部屋を出た時と変わらない姿だった。

「ただいま」

一人暮らしだというのに、実家にいた時からの癖で言ってしまう。

着替えもしないスーツ姿のまま、専用の椅子に座り、自分の首筋にケーブルを取り付け、ディスプレイを被る。これは現在主流とされているナノマシンを使ったネットワーク機器であった。

起動すると周囲にメールや更新情報が映し出される。

「まずはメールから……って、重要そうなのはないな」

青年は急いでメールソフトを閉じるとあるゲームを起動する。

ゲームの名前は『ユグドラシル』。DMMO—RPGと呼ばれる仮想世界をまるで現実のように体感しプレイすることが出来る、今現在において最も流行しているオンラインゲームだ。

青年もそのゲームのプレイヤーの一人であり、今日はギルドの仲間との約束をしていた。……していたのだが急な仕事が入ってしまった

たため時間ギリギリになっていた。

すぐにユグドラシルにログインする。

目の前に映し出されるユグドラシルのロゴの後に、自分の所属するギルドの拠点であるナザリック大墳墓が見えてきた。スポーン地点は自室であり、約束していた場所は相手の部屋で同じ階層にある。魔法の指輪を使い瞬間的に移動する。

部屋の前に着き入室の許可を相手に求めると気のいい返事が返ってきた。

「式式先輩、入っても良いですか？」

「おお！来たか。入って良いぞ丁度、今完成したところだ！」

「本当ですか！失礼します！」

式式先輩——式式炎雷は青年の所属するギルド『アインズ・ウール・ゴウン』の先輩であり青年の友人であった。

青年が式式炎雷の部屋に入るとそこにはメイド服を着た黒髪、黒目の女性NPCが立っていた。そのNPCを見た瞬間に青年は思わず歓喜の声をあげる。

今日、式式炎雷と会う約束をしていたのは、彼が自作したNPCの完成と起動を一緒に見ようというのが目的であった。

「やりましたね先輩！デザインといい、装備といいかなり手間を掛けて仕上げてきたのがわかります！すごい！すごい！」

「そ、そうか？まあ、でもそこまで褒められると悪い気はしないな」

子供のようにはしゃぐ青年に、式式炎雷もどこか自慢げな表情を浮かべている様子だった。ゲームの仕様上、表情の変化はないのだがそれでも青年も式式炎雷も喜びが動きや言葉から漏れ出ている。

「名前はとうするんですか？アルファ、ベータときていますから順番的に姓はガンマですよね。後は名前ですけど……」

「ああ。そこは昨日悩みぬいて考えてきたんだが、『ナーベラル』って名前にしようと思ってるんだ。だから繋げて名前は『ナーベラル・ガンマ』。どうだ？」

どうだと聞かれた青年であったが、正直名前の意味はよく分からないう。だがそれよりも早く動くところが見たかった。

「いいと思います。それより早く起動してみましようよ！」

「お前、本当に意味わかってるのか？……まあいいか、そうだな、俺も早く動かしてみたいし起動しよう！」

そう言って式式炎雷はNPC用のコンソールを出現させ、拠点NPCの一つとしてナーベラルを登録し、起動させる。するとまるで生まれたての雛のように式式炎雷の後をくつついて動いている。

たったそれだけの動作なのだが割とデザイン面や設定などに入れ込んでいた式式炎雷は、声から嬉しさが滲み出していた。

「おお！やっぱ動くと違うなあ！拠点に置いておくには惜しいくらいだ！」

「先輩ばつかずるい！俺にも貸して下さいよ！」

「あー、ちよつと待ってる。よし、お前に指揮権移したぞ」

その言葉通りに自分の後ろにナーベラルがついてきて来る。それが面白くて青年は他人の部屋だというのにグルグル回っている。そんな子犬と戯れるような姿を呆れつつも、ナーベラルに時間をかけて作って良かったと思う式式炎雷。

一しきり遊んだところで青年はあることを提案する。

「先輩、せっかくなら『ルプスレギナ』と『ユリ』加えて記念にスクショ撮りませんか？確か姉妹って設定にするんですよね」

ナザリツクで開かれた会議で拠点防御用のNPCの作成が立案された。そこでせっかくなら姉妹とした方が面白いんじゃないかという他のメンバーの意見が採用され、作られた順番に姉妹として設定されることになったのだ。

式式炎雷もグツジョツブのアイコンを出して答える。

「それいいな！よし早速行ってみよう、確か第十階層の玉座だったよな？」

「はい！昨日はそこで見かけました！」

「じゃあ行くか！」

二人は指輪を使いナーベラル共々一緒に転移する。

転移した場所は玉座の間の近くの通路。そこからナーベラルを連れて歩いて向かう。

玉座の間に着くと既に一人のプレイヤーがコンソールをいじっていた。

「やまいこ先輩、こんばんは！」

「やまいこさん、こんばんは」

「式式さん、後輩くん、こんばんは！」

やまいこと呼ばれた巨大な姿の半魔巨人は、ナザリックの数少ない女性メンバーの一人である。やまいこはナーベラルの姉という設定にあたるユリ・アルファを創ったプレイヤーであり、今はユリの設定を書き加えている途中であった。

やまいこもまた青年の先輩であり年上でもあるため青年を『後輩くん』と呼んでいた。そもそもこのギルドで一番の新参者である青年はみんなから名前と呼ばれず後輩という呼び名が定着してきている。

「やまいこさん！遂に式式先輩が作っていたNPCが完成したんです！」

「俺のセリフを取るな！……まあ、これがユリとルプスレギナの妹の設定のNPCナーベラル・ガンマだけど、どう？」

少し緊張が読み取れる声色で自慢のNPCをやまいこに見せる。何だかんだでナザリックにおける女性の意見は重要なのだ。

「可愛らしくていいと思いますよ！純日本風の顔つきと戦闘用メイド服のデザインがマッチしていてボクは好きです」

「そ、そうですか。そう言ってもらえると頑張った甲斐がありますよ……あつ！そうでした。良かったらで良いんですけどナーベラルの完成祝いにスクショで記念を残そうと思うんです。それで一緒にどうですか？」

「良いですね！ぜひ撮りましょう！」

そう言つてユリのコンソールを閉じ、玉座がバックに見える位置に移動する。式式炎雷もナーベラルと待機状態のルプスレギナを連れて移動する。

それを遠目から見ただけで動かない青年にやまいこが声を掛ける。

「あれ？後輩くんは写らないの？」

「あ、いや、俺はNPCを作ったわけではないですから……。先輩方、二人で撮った方がいいかなあと思ってた……」

「そんなことないよ！後輩君、素材集めとか頑張ってたし、それに一番創られるの楽しみにしてたじゃん！一緒に写りたいですよね！式式さん！」

「ああ。ナーベラルを創る時だいぶ手伝ってもらったからな。お前は絶対入るべきだ」

「……それじゃあ、お言葉に甘えて」

二人の言葉に照れ臭そうに中に入る。

前面にナーベラルと青年と後輩、その後ろにやまいことルプスレギナとユリが立つ。

そして式式炎雷があいずをだしてスクショを撮る

「よし撮るぞ！ハイ、チーズ！」

カシャリとSEが流れ画像が保存される。

式式炎雷はスクショをすぐに写真データ化してやまいこと青年に送る。

「お、良く撮れてるな！」

「うん、どことなくみんな笑っている感じがするね！」

「はい！今日は良い記念日になりました！」

この写真は永遠に、思い出は青年の心に残ることになる。

「……なさいー！」

顔に強い衝撃を受けたことで脳が急いで活性化しようとする。

だがそれよりも早く二発目の衝撃が顔面に放たれる。

「起きなさいー！いつまで寝ているつもりかしら？」

「グっ！……はあ……ああ……」

顔面を思い切り殴られたことで鼻と切れた口の中から血が溢れ流

れ出る。

俺は鎖でつながれていない方の左手でこするように血を拭うと手には紅がベツタリとついていた。その色を見たせいなのか痛みが余計酷く感じられた。

薄暗い石畳の部屋と、壁と鎖で繋がれ逃げることが出来ない俺。先ほど見ていた夢とはあまりにも違う光景に気分の悪さを憶える。

「……起きた、起きたから……もう、殴らない……ツツ！」

俺の言葉を聞いたうえでもう一度、鼻っ柱に拳が飛んでくる。

鼻の奥が熱くなり、血がまるで封を切ったかのように溢れ出て冷たい石畳に赤い点を残していく。脳が揺れ、目からは反射的に涙が零れた。

「今のは私に対して口答えした分よ、立場を弁えなさい反逆者」

「……………」

俺に対して反逆者と罵る女性の名は「ナーベラル・ガンマ」

かつてゲームのいちNPCでしかなかった彼女は異世界に転移したことで生を受けた。

一方の俺は同じギルドメンバーとの意見の違いから内部抗争に発展し、そして敗れた。

地位も力も全てを奪われこの薄暗い地下室に繋がれている。

「さて、今日のあなたの考えを聞かせてもらおうかしら。アインズ様はあなたが考えを改めるといふのなら至高の席に戻しても良いと仰ってくれているわ」

血に濡れた顔で絞り出すように答える。

「……俺は……今のモモンガ先輩に従う気はなっ——ガッ！」

俺が全部言い終わる前に容赦なく拳が放たれる。まるで俺の返答が分かっていたようだった。

次にナーベラルはその細く白い両手で俺の首を締め上げる。

「なぜ！……なぜ！従わない！至高の存在としてナザリックの頂点に就くことの何が気にいらないというの！」

「……………」

必死に腕を剥がそうとするがビクともしない。

息が出来ず必死にもがき苦しむ俺の姿を見るナーベラルはどこか嬉しそうだつた。

苦しみに意識が飛ぶ瞬間、やつとのことで手を放してもらえぬ。

「ガハツ、ハアーハアー」

必死に肺に空気を送るを俺を見下すようにナーベラルは持つてきたポーションを俺の頭にぶちまける。すると折れているであろう鼻の骨や、打撲による顔の腫れなどが一瞬にして治っていく。

いつものことだった。苦しめては治し、また苦しめる。これが永遠と続く、永遠と……

「あなたはどこにも逃がさない。どこにも行かせない。私達、いえ、私にとつてはあなたが至高の存在でも、愚かな反逆者でもどちらでも構わない。私の側にいてくれるならそれでいい」

そう呟くナーベラルの顔はどこか笑みを浮かべているように俺は見えた。

ああ、式式先輩……どうやら育て方を間違つたみたいですよ。

「……また来るわ。今日は始まつたばかりですもの」

そういつてナーベラルは部屋から出ていく。

残されたのはポーションと血にまみれた俺が一人。

ナーベラルが来たということは今日は水曜日か……。

明日はソリユシャンに、その次はシズ。考えただけでどうにかかなりそうだ。とりあえずは今日のナーベラルからの仕打ちに耐えよう。

待て、しかして希望せよ、か……。この先に希望はあるのだろうか？

水曜日 噛み跡のち嫉妬

「……また来るわ。今日は始まったばかりですもの」

そう青年に告げたナーベラルは部屋から出ていく。目的地は現状ナザリックに残っている唯一の至高の御方「アインズ・ウール・ゴウン」の書斎。今朝の青年の意思を確認して、その内容をアインズに報告することがプレアデスの務めである。

そして本日の青年の世話係はナーベラルであり、今朝は青年への意思確認と懲罰を行ったことを報告に行くところであった。

ナーベラルは歩きながら考える。何故、青年は至高の存在に戻ろうとしないのか？

ただ自分たちプレアデスに嬲り者にされる現状よりも、自らの罪を認めアインズ様の許しを得て至高の存在に戻ることに何が気に入くないのか？ナーベラルには理解できなかった。

(私にとっては確かにどちらでも良い。いえ、むしろ……)

ナーベラルの足は自然と早くなる。

今日は確かに始まったばかりだが時間は有限だ。

だとすれば急いで損はない。

アインズの元へ向かうナーベラルの前から見知った顔のメイドがやって来る。

赤い髪に褐色の肌、そう彼女は

「あれ？ナーちゃん、今から報告つすか？」

「ルプー……ええ、その通りよ」

『ルプスレギナ・ベータ』ナーベラルの姉にしてプレアデスの次女。

その彼女が自分とすれ違うように前から来たのだった。

「あー、その様子だと今日もダメっぽいですね。今日はもう何かしたんすか？」

「数発殴ってきて、ポーションで治療してきたところよ」

「朝から激しいっすね」

「……まあいつも通り答えは変わらずだったんだけど……いつになったら戻ってくれるのかしら……」

「……早く至高の座に戻ってきて欲しいっすね」

そんな会話をする二人の顔は内容に対して嬉しさを隠すようであった。

基本的にはほとんどの僕が青年が至高の存在への復帰を望んでいる。

だがプレアデスだけは違う。良くも悪くも彼女たちはおもちゃを手に入れた。それは普通では決して手に入らないような特別なおもちゃだ。それをみすみす手放すつもりはない。彼女たちもまた異形種なのだから。

一拍の間をあけた後、ルプスレギナは何かを思い出したのかその場を後にする。

「——それじゃあ、ナーちゃんはアインズ様への報告があるようなので私はこれで失礼するっす。後でプレゼントがあるのでお楽しみに！」

「……プレゼント？」

ナーベラルが聞き返す前に既にルプスレギナはその場から消えていた。

はて、プレゼントとは一体何のことか？ナーベラルに思い当たる節は全くない。

だが、ルプスレギナは昔から快活な性格をしている、何か思いつきで行動したのかもしれない。だとすれば、自分のあずかり知らない、と言ったところでどうしようもないという訳だ。

ナーベラルは再び歩みを進める。

それから少ししてアインズの書斎に到着する。

アインズからの許しを得て入室した途端一番先に目に映ったのは、アインズの書斎にある机の上だ。山積みの資料があり至高の存在としての仕事の多さが目に見えて分かった。

今回の彼の意思を確認したことを報告する。アインズは「そうか」と一言つぶやいた後、腕を顎に当て考えるそぶりを見せた。そして何かを思いついたのか口を開く。

「ナーベラルよ、たまには飴を与えてはどうだ？」

「飴ですか？」

「いつも虐待してばかりでは余計に意固地になるだけかもしれない。逆に少しの優しさを見せればそれがきっかけで心を開いてくれるかもしれない。試してみる気はあるか？」

「ですが……どのようなことすれば？」

「確か後輩はリンゴが好きだったはずだ。食堂に行き盛り合わせを貰いプレゼントすると良い。きつと喜んで受け取って食べてくれることだろう」

「わかりました。やってみます」

アインズに丁寧な退出の言葉を述べると書斎を出ていく。

アインズの言う通り、自分はこれまで彼に対して暴力や屈辱を与えることで自分の思いをぶつけてきてばかりだった。鞭ばかりでは人は壊れてしまう。偶には飴をあげよう。アインズ様のお墨付きもあるのだから。

ナーベラルは考える。リンゴを受け取った嬉しそうな彼の顔を……。思えば至高の地位を剥奪されてからはナーベラル自身は彼の喜んだ顔を見たことはなかった。一体どんな風に笑うのか、どんな顔をするのか、反逆者に落ちても変わらないのか。見たい。見てみたい。

ナーベラルはいつもの仏頂面の仮面が壊れかけ、その中から狂相といつても過言ではない笑みを浮かべる。もし通りがかった人がいれば目を疑ってしまうような表情であった。

それくらい楽しみであるのだ。

誰もいない廊下でナーベラルは再び仮面をかぶり直し食堂へと向かう。

目的は勿論、ナザリック産の最高級リンゴを剥いてもらい彼に食べて貰うためだ。

歩きながらナーベラルは思っていたことを考える。

（さすがアインズ様。至高の御方の助言は意義深い。ああ、あの反逆者の喜ぶ顔が見れるなんて……。そのまま飴を与え続けてもいいし、すぐに鞭を振りかざして苦痛に落とすのもいい。ふふ、今から迷って

しまうわ)

異形種の愛は歪んだものが多い。
ナーベラルは愛というものを理解しきれてはいない。
だから苦痛も快樂も愛情として伝えてしまおう。



ポーションと鼻血、それと涙に濡れた顔を腕で拭うように擦る。
この部屋には時間を確認できるものはない。だが、いつも余計な世話をしてくれているプレアデスが交替してナーベラルが来たということはきつと朝なのだろう。

……朝っぱらから俺はボコられたのかと思うと自然と腹が立つ。
まあ、口答えしたせいで二、三発多く殴られて首まで絞められたのだが。それにしたって鼻の骨が折れるまで殴るのは酷いと思う。

「はあ、家に帰りたい……父さん……母さん……元気にしてるかな……」

現実の世界で生きているであろう両親のことを思うとこんなところでグズグズとしてはいられない気持ちになる。多分だが俺が失踪して心配していることだろう。……してるよね？現実世界のマズイ飯も今思うと懐かしい。あの頃に帰りたい。

……ダメだ、思考がマイナスに傾いてしまう。先が分からない未来に落ち込むばかりで元気が出ない。

俺は壁に寄り添うように体育座りをする。

あー、髪と服がベタベタして気持ち悪い。

「お風呂に入りたい」

自分で喋っていて悲しくなる。

というか普通に考えてこの部屋は何もなさすぎる。シャワーぐらいあつて、自由に浴びさせて欲しいものだ。

「異形種だった頃は汚れなんて気にもしなかったんだけどなあ」

俺は少し前まで異形種と呼ばれる人間とは別の存在であった。だが先輩と喧嘩したせいで人間になった……いや、戻されたというべきか。戦闘能力もなく格下であった一般メイドにすら負ける可能性す

らある現状では脱走は難しい。だから今は大人しく従う他はない。そんなお風呂に入りたがっている俺の牢獄に、誰かが入室してくる。

ナーベラルが帰ってきたのかと思い、顔をあげるとそこには予想とは別の人物がいた。

「おはようっす！」

「何だ、ルプスレギナか……おはよう」

そこにいたのはプレアデスの次女『ルプスレギナ・ベータ』だった。プレアデスの中では俺に対して直接、危害を加えてくる方ではないのでまだマシな方であると言える。ただ、本質はやはりカルマ値がマインナスというだけあり悪質ないたずらを仕掛けてくるが多々あるので信用はできない。

「何だとは失礼っすね！もしかして何か困っているんじゃないかと思っただけであげたのにその言い草はあんまりっす！」

「……それはすまなかった」

確かに今は体と服にへばりつくように付着している血とポーシオンを今すぐ洗い流したいと思いがあがる。本来ならナーベラルの仕事の筈なのだがどういう訳かルプスレギナが助っ人に来てしまった。

匂いとべた付きは正直苦痛だ。仕方ないルプスレギナに頼るか。

「ルプスレギナ……悪いけど風呂に連れて行ってもらえないか？」

「しようがないっすね！それじゃあ、ナーちゃんが帰ってくる前にパッと洗ってあげるっす！」

「一人で入れるんだけど……やっぱりお前も来るのか……」

この地下牢の隣の部屋は風呂に改装されており、プレアデスが持つ鍵で足かせを外してもらって自由になったところでやっと入れる様になっている。正直、このシステムは面倒だと思っし、プレアデスに裸を見られるのは少し恥ずかしかったりする。それでも、風呂はこの牢獄生活の中の数少ない癒しなので入れるときに入る。

足の枷と腕の枷を外されてやっと自由に動けるようになる。

「やっぱり繋がれていると結構ストレスたまるんだよなあ」

「逃げようとするから悪いんすよ！さっさと至高の座に戻ればこんな

扱いを受けずに済むのに……」

「そうだな……今のところ戻る気はないが……もし、戻ったら今度は嘘つきの人狼メイドを鎖でつなぐことにしようかな」

「それは酷いっす！それに私は嘘なんてつかないっす」

「どうだか。お前の下らないいたずらで何度、俺が酷い目にあつたことか。それに人狼は嘘つきであると相場が決まっている」

「そんなこと言っていると本当に酷い目にあわせるっすよ」

俺の言葉にルプスレギナは頬を膨らませて怒っているような素振りをする。

偶には俺だつて毒を吐きたいときぐらいあるのだ。だが、ナーベラルやソリュシヤンなんかはすぐに力を振るってくるので気を付けなければならぬ。逆にルプスレギナは軽く受け止めてくれるので言葉を選ばずに済む。

逃げないようにルプスレギナに手を引かれ隣の浴室につく。

俺は汚れた服を脱ぎすて、腰にタオル一枚を巻いた状態になる。やっぱり素っ裸は恥ずかしいのである。

そこまでは良かった。だがどういう訳かルプスレギナまでもが服を脱ぎだしたので

「……自分一人で入れるんだけど」

「遠慮しなくていいっすよ。背中も流してあげれるし、それになにより混乱に乗じて脱走するつもりかもしれないっす。だから、見張りも兼ねてっすことっす！」

「人狼つてのは嘘つきなだけでなく、疑り深いんだな」

「当り前じゃないっすか！せつかく手に入れたおもちやを手放したくないっす。だから疑り深くなつても仕方ないというものっす！」

おもちやつて……深く考えるのはやめよう。俺が反逆したその日から扱いが悪くなることは分かっていた。ソリュシヤン当たりなら食料と言われていたかもしれない。

俺は腰にタオルを巻いてあれを隠す。ルプスレギナも衣類を取つていく。

恥ずかしいが乗り気のルプスレギナを見ると、引くに引けない。

浴室に入ると既に浴槽には湯が張られた状態にあった。やっぱ魔法ってすごい。

先に髪を洗うためにシャワーを出す。ナザリックの洗髪剤はどれもが一流品らしい。ナザリックを作る時そんな設定をした覚えはないのだが、それでも使えるものは使う。

ルプスレギナはシャワーヘッドとシャンプーを手に取ると俺の髪を洗っていく。

「痒いところはあるっすか？」

「いや丁度いいよ。あと胸を押し付けるな。胸を。服濡れるぞ」

「またまたあ、本当は嬉しいくせに！」

「はあ……俺はケモナーじゃないからそういう趣味はないよ」

「ケモナー？」

「あー、覚えなくていい。忘れる。メコン川先輩に怒られちゃうから」
性的な興奮がないわけではない。だがそれを悟られると負けてしまう。弱みなんて一切握らせるわけにはいかない。

それは別として人に髪を洗ってもらうのは気持ち良かったりする。

昔、妹と一緒に風呂に入ったのを思い出す。

「何、ニヤニヤしてるんすか？」

「えっ！……ああ、昔、妹と一緒に風呂に入っていた時があつてさ、今のルプスレギナみたいに髪を洗ってあげたんだ。懐かしいなあつて……」

「……へえ」

その言葉以降ルプスレギナは黙ってしまった。

うっかり口を滑らせてしまったのがまずかった。基本的に彼女たちはリアルな話を好まない。俺からすれば帰りた場所だが、彼女たちからすれば返したくない場所だからだ。あのお喋りなルプスレギナが黙ってしまうぐらいには機嫌が悪くなっている。

その後トリートメントをしてもらった後に、背中を流してもらおう（流石に前は自分で洗った）。その時もルプスレギナは終始黙った状態であつて何となく怖い。

体を流し終わった後に恐る恐る聞いてみる。

「ルプスレギナ……怒ってる？」

「……」

何も答えないということが答えだった。

確かに俺は現実へ帰りたとは思っている。だがそれとは別にこいつらNPCを嫌っているわけではない。仲良く終われるならそれに越したことはないまでだ。

「悪かったよ……リアルの話して」

「……そうっすよ。私の、いえ僕の前でリアルの話なんてして……本当に悪い子……」

そうしてルプスレギナは大きく口を開けて、小さく呟く。

「これはお仕置きっす」

瞬間、肩に鈍い痛みが走る。

斜め横に目をやると俺の肩を噛むルプスレギナと目が合う。

本気で噛んでいないことは分かる。本気なら今頃、肩はない。

数十秒経ちルプスレギナはそつと口を肩から離す。

肩には目立つように歯形がくつきりと残っていた。

ルプスレギナはその細い指で歯形をなぞるように滑らせていく。

「おい、もういい——グっ！」

次は反対の右肩に、その次は二の腕と次々に歯形を俺の体にまぶして行く。痛いには痛い朝の骨折に比べればまだマシと言えるだろう。

俺は犬を飼ったことがないからどういうつもりでルプスレギナが歯形を残しているのか分からない。ただ、暴力、それも酷い奴でないことに安堵する。

「もう満足か？……そろそろ服を着たいんだけど……」

「ふふ、良いっすよ。ナーちゃんへのプレゼントの用意も出来たっすから」

「どういうことだ？」

「その姿をナーちゃんが見たらどう思うんすかね？」

「……………ああ、クソ」

ナーベラルの気持ちを分かった上でルプスレギナは齒形を付けたのか……。

やっぱり人狼は信用できない。
確かに見せられねえよな。

◆

ナーベラルは手にバスケットを持ち、反逆者が囚われている牢獄へ続く道を歩いていた。バスケットの中身は彼の好きなリングが綺麗に切られて入っていた。

これもアインズからのアドバイスがあつたからこそである。

牢獄に入ると彼がいたが、その姿は出ていく時とは違っていた。血とポーシヨンで汚れているはずが綺麗になくなっていたのである。

「あら？見ないうちに小綺麗になつて、どういう作業かしら？」

「その、ルプスレギナが来て風呂に入れてくれたんだ」

「ああ、なるほど」

本来であれば勝手な真似をしたということを理由にいたぶつているところだが、今回はそこをぐつと我慢する。

飴と鞭だ。

……それにしても様子がどこかおかしい。

落ち着かないというか、汗をかいているというか、何かを隠しているような。

ナーベラルはドツペルゲンガーである。人の表情には敏感であつた。

彼が着ているYシャツの襟首を掴み問いただす。

「何を隠しているの？」

「何も……」

嘘だ。一瞬、目をそらしていた。

ナーベラルは思いつきり締め上げると服の隙間から一瞬見えた『肩』に目がいく。

見間違うはずもない、綺麗な噛み跡が見えた。

「どういふこと！」

「やめっ——！」

思い切りYシャツを破るようにして裂く。ボタンは宙を舞い、青年の上半身が露になる。そこには『いくつもの噛み跡がくつきりと残っていた』

まるで『そういうこと』をした後ですと見せびらかしているようであつた。

手には無意識のうちに力が入る。

「いや、これは、ルプスレギナが無理矢理……」

「今日は、」

「え？」

「アインズ様に言われてあなたのためにリンゴを剥いてきたの。だから全部が終わったら、あなたに食べさせてあげる。だからしっかりと意識を保っていてね」

ナーベラルはこれがルプスレギナのいたずらであることはとつくに分かつていた。それでも嫉妬してしまう。

(これが嫉妬するということなのね……)

この反逆者の当番は今日だけは私の筈なのに。それなのに……！

甘いリンゴを与える前に最高の苦痛を与えよう。もう二度と私を嫉妬させないように。

ナーベラルの仮面は本日二度目の崩壊を迎える。

木曜日 捕食のち蹴り

大手企業のオフィスの一室、その中でインカムを使って会話しながらPCを打ち込んでいる男がいた。オフィスの中はまばらに人がおり、それぞれがそれぞれの業務を淡々とこなしている。そのため沈黙とはいかないまでも室内は割と静かであった。

男は声が響き渡らないように小声でインカムで通話する。

『あんたいつになったら家に帰るの？もう一年以上も帰ってないでしょ！』

「わかっているよ、そのうち帰るって」

『前にもそういつて先延ばしにしていたじゃない！父さんもあの子も心配してるんだから、たまには顔ぐらい見せなさい！』

通話の相手は会話の内容から母親であるようだった。

男は頭を掻く。男は一人暮らしを始めて今年で数年目だ。

就職に成功した企業では仕事をドンドンと増やされていった。しかし、本人はその状況を決して悲観していなかった。自分の能力を会社が認めてくれたのだと諸手を上げて臨んだ。また、男の務める企業の待遇の良さも仕事への意欲につながったと言える。

そのおかげで今では職場において重要なポストに就くことが出来た。だが、仕事が忙しくなるにつれてプライベートな時間も減ってきている。趣味のゲームはもちろん、実家に帰ることさえままならない状態であった。

そんな出突っ張りの息子を心配した母親は帰省を催促する電話を掛けたのである。

「今、仕事が忙しくてどうしても帰れないんだよ。今度の連休には必ず顔を出しに行くから。そろそろ勘弁してくれない？」

苦笑い気味にそう話す男は正直、通話に疲れていた。

今日は仕事を終わらせて早めに帰らなければならぬ用事がある。

『……はあ、約束だよ。それじゃあ、しっかりとご飯食べて、お風呂に入って清潔にするんだよ！』

「わかったよ、またね母さん」

そう言って通話を切る。男は溜息一つに大きく背伸びをする。

そこへ男の同僚が通話が終わったのを見計らって話しかけてきた。

「よう！お疲れさん。また随分絞られたみたいだな！」

「ああ、母さんにも困ったもんだよ。顔見せろってうるさくて」

「まあ、両親なんてそんなもんだろ。それより今日は午後から早上がりするって言ってたけど何か用事があるのか？」

「……実は少し前までやってたオンラインゲームがサービスを終了するらしくてさ。最後にゆつくりプレイしようと思ってるんだ」

「それなら俺も知ってるぜ。『ユグドラシル』って奴だろ？いや、だからってゲームのために半休取るかね……」

その言葉に男は「そうかもな」と自虐的な笑みを浮かべる。

だがそれだけの思いを男は「ユグドラシル」に持っていた。もう数年もプレイしているゲームだ、愛着というのも自然と湧いてくるというものであった。

だがそれ以上に別の理由がある。

約束をしていた。最後に会いたいと言ってくれたギルドメンバーとリーダーのためにも絶対にログインしたい、そう男は思っていた。話しながらもデータを打ち込み、全ての作業が終わったところでソフトを閉じる。

資料と退社の準備を淡々とこなす。

「一緒にゲームをやっていた人たちと最後に会おうって約束してるんだ。俺も思い入れあるし。だから、最後までいいはってね……」

「ふーん、そんなもんかね。まあ、いいや。それじゃご苦労さん！」

「おう！お前もすっかり働けよ」

そう言うと同僚は手のひらをヘラヘラと振って答えた。

ガスマスクをかぶり会社を出る。

そのあとはいつも通り電車で揺られ、自宅付近の駅で降りてマンションに向かう。

男は通いなれた道を淡々と進んでいった。

男は現在一人暮らしだ。現在付き合っている女性はいない。寂し

くなる時もあったが、さつき見送ってくれた同僚を含め友人関係は円満であると言える。だから何だかんだで今の生活には満足していた。近道になる路地裏を抜け、マンションにつながる道を真っすぐと歩いて帰る。

住んでいるマンションに到着すると、自分の郵便受けをパパッと確認しすぐにエレベーターに乗る。

(それにしてもユグドラシルをプレイするのも久しぶりだな)

そんなことをぼんやりと考えながらエレベーターが目的の階に着くのを待つ。

自分の部屋の前に着き鍵を開けると、それなりに整頓された部屋に入る。

「ただいま」

ガスマスクを外し、部屋着に着替える。これから長時間ゲームをプレイするつもりなので昼食を軽く摂った後、専用の椅子に座り機器を接続していく。

メールを確認し終え、いざゲームを起動する。

目の前に映し出されるユグドラシルのロゴの後に、自分の所属するギルドの拠点であるナザリック大墳墓が見えてきた。スポーン地点は自室であった。

自分の他にメンバーがログインしていないか確認するコンソール画面をだすが誰もログインしていなかった。といっても現在、ギルドに残っているのは自分を含めて数人だけなのだが。

「おかしいな、モモンガ先輩、プレイするって言ってたのに……。昼だから食事でもしてるのかな？まあ、そのうち来るだろ……」

モモンガというのは男——「後輩」の先輩ギルドメンバーであり、『異形種ギルド』アインズ・ウール・ゴウンのギルド長の人物であった。今回、ユグドラシルの最後を一緒に過ごすことを決めたのもモモンガからの誘いがあったからだ。

モモンガは良きギルドの先輩であった。

アインズ・ウール・ゴウンに加入した自分に優しく接してくれ、リー

ダーとして今日までナザリックの維持をしてくれた。ギルドメンバーがほとんどやめてしまった今でもだ。

だから今日の約束だけは守ってあげたいと決めていた。まず初めに向かったのがギルド拠点『ナザリック大墳墓』の中心である玉座であった。ナザリックの内部は荒らされた形跡がなくモモングの働きが見てとれた。

それと同時に後輩は複雑な気分にもなる。

(これまでずっとログインしてなかったのに、最後だけ顔出すなんて虫がいいよな)

そんな後ろめたさを胸に秘め、玉座の紀章を見て回る。どのデザインも良くできていて見ているだけでも楽しかった。

その中でギルドメンバー達と一緒に作った思い出のNPC達があった。

六姉妹(正確にはあと一人いるけど)のメイド集団『プレアデス』がいたのだ。

こんなに良く出来たNPCなのに。

「もう見れなくなるなんてもつたいない……」

そう自分の思いを口にしながらプレアデスを観察する。

ユグドラシルの別売りツールを使って作られた彼女たちはどれも個性豊かな顔つきと設定をしていて、見ている飽きることはない。

「モデリングデータだけでも抽出できないかな。いや、いつまでも昔のゲームを引きずるのも……。うーん」

ユグドラシルが終わると聞いたときは後輩も最初は大いに悲しんだ物だったが、今となってはどこか割り切れている。

過去の思い出は大切だがそればかりにとらわれていては前に進めない。もうゲームにのめり込めるほどの情熱はなかった。

そう思うと途端に寂しくなる。そして、ゲームのキャラとは言え目の前のプレアデス達も可哀そうになってきた。ギルドみんなが必死に作り上げてきたNPC達だ。消えてなくなるのはとても悲しい。

そんな後輩は何かを思い出したのか、アイテムボックスを探る。

取り出したのは六つの綺麗なりボンであった。色は白、赤、青、黄、

緑、桃の六色の綺麗なりボン。

「♪」

『贈呈用リボン』ナザリックにおいて感謝を示す時にプレゼントとして使われる課金アイテム（一個十円）である。これらは先輩のギルドメンバーが引退するとき之余っていたものを譲り受けたものであった。そのことを思い出した後輩は、取り出したリボンをプレアデスたちに装備させていく。

プレアデス一体、一体に思い入れがある。最後まで贈り物をしてあげよう。

「よし、こんなもんか」

全員に装備し終えた後に、一つのメッセージが現れる。

【モモンガ がログインしました】

そして目の前に【転移】のエフェクトが発生する。赤い球を腹に入れたアンデットの最上位種オーバーロードが姿を現した。久しぶりに見る禍々しいデザインは最後にログインした時と変わりなかった。「久しぶりですね後輩君！」

「……お久しぶりです。モモンガ先輩」

モモンガの嬉しそうな挨拶を聞いてやっぱり来てよかったと思う後輩

「また来てもらえて嬉しいです！もしかしてメールを読んできてくれたとか？」

「実はそうなんです。引退した身ですがナザリックには沢山の思い出がありましたから。もう一度見直そうかなって」

「なら話しながら色々見て回りましょう！あつ……でも、時間とか大丈夫ですか？」

「……はい、大丈夫です。今日は休みを取ってきたので」

それからモモンガとナザリックを散歩しながら思い出話に華を咲かせていく。

だがこの時の二人はまだ知らなかった。

これから数時間後にこの空想のナザリックが実物になることを。

「……………」

目を覚ました時に真つ先に感じた感覚は「痛み」であった、痛い。痛い。痛い。

痛みのする左腕に目を向けると肩から先がきれいさっぱりと無くなっていた。

「ああ…ああ……………」

次いで強烈な吐き気が襲ってくる。そうだ思い出した。俺は……………」

「目を覚ましたのね。反逆者に堕ちたと言え、至高の御方であったあなたがこんなことで気絶してしまうなんて些か情けないんじゃないかしら？」

金色ロールの髪に青い目をしたメイド。プレアデスの「ソリュシャン・イプシロン」が俺の目の前に立っていた。その顔はサデイスティックな笑みを浮かべている。

俺の世話係（という名の虐待）のナーベラルと交代したソリュシャンによって左腕を食われてしまったのだ。そのあまりの激痛と衝撃的な光景に意識が吹っ飛んだのである。

思い返しただけでも気分が悪くなる。自分の腕がソリュシャンの胸の中で溶けていくのだ。腕の断面は酸に焼かれていることで出血が抑えられていた。

「はあ……………はあ……………」

必死に息を整えようとすがあまりの痛みに上手くいかない。

俺はうつ伏せになりグツと歯を噛み締めてただ時間が過ぎ去るのを待つ。

苦しむ俺とは反対にソリュシャンは恍惚の笑みを浮かべながら俺の左手を味わっていた。

「ああ、最高に甘美……………。至高の御方であったあなたの腕を食べるこ

とが出来るなんて……、ふふっ、あははは！」

一人、悦に浸っているソリュシヤンの姿を見上げて俺は精一杯の睨みを聞かせて、吐き捨てる。

「……気持ち悪い」

「！」

俺の言葉に反応したソリュシヤンはさっきまでの表情が嘘のように冷酷に満ちた顔になる。そしてそのまま俺の側に近寄ると、顔面に思いつきりつま先をめり込ませた。一瞬遅れて、自分の顔面を蹴られたことに気付いたがその時には激痛が襲っていた。

「グッ！、ハア、ハアッ！」

ちようど鼻先に当たったことで鼻血が溢れ出ていく。

痛いというより苦しいという表現の方が正しい。

残った右腕で血を拭い去ろうとするが溢れ出てくるためきりがない。

うつ伏せの体勢から仰向けになり大きく深呼吸をして呼吸だけでも整えようとするが上手くいかない。反射的に目からは涙が溢れてくる。

「その苦痛に歪む顔も素敵……」

ソリュシヤンはそつとしゃがんで顔を俺の顔に近づける。そしてその口から艶めかしく舌を突き出して、俺の顔に広がる血と涙を甘露水を舐めとるように口にする。

そして問う。いつもの問いだ。

「確認するけど、至高の座に戻る気は？」

「ハア……ハア……腕一本食べてから聞くのかよ……戻る気はない。これからも」

「口ではそう言ってもいつまでも耐えられる訳ないじゃない……どうせ私はあなたに嫌われているんですよ。だったら、今のうちに楽しんでおかないと。ねえ、次は右手にしましょうか？それとも足？それとも——目？まあ、いいわ、とりあえずアインズ様に報告してからにしましょう」

ソリュシヤンはそう言っつて部屋を出ていく。

俺は無くなった左腕と蹴られた顔の痛みが引くのを待つ。たぶん引くより早くソリユシヤンが帰ってきてしまうけど。
ああ、早く一日が終わらないかなあ。

木曜日 ドロドロのち水責め

プレアデスの一人『ソリュシャン・イプシロン』が目を覚ました時に、一番初めに見たものは二人の至高の存在であった。

至高の存在……自分たちの創造主であり、命を懸けてでも使えるべき相手であることをソリュシャンは生まれた時から知っていた。それはキャラ設定による学習と、NPCとしての本能から自らの役割を刻まれているのである。

目の前の二人を観察する。

一人は自分と同じであるスライムと、もう一人は輪郭揺らめく亡霊種であった。

二人の至高はソリュシャンが目覚めたことをいたく喜んでいた。

ソリュシャンに視線を向けたまま雑談を開始する。

「色々ありましたけど何とか完成することが出来て良かったですね！へろへろ先輩！」

「そうだね。これも後輩と一緒に素材集めを手伝ってくれたからだよ」

「いや、そんなことないですよ。みんなで作ったんです。それより先輩！名前は決まっていますか？」

「うん。『ソリュシャン』苗字が『イプシロン』だから繋げて『ソリュシャン・イプシロン』はどうだろうか？」

「……うん！良いと思います」

「意味分かってる？」

至高の二人はソリュシャンの前で色々雑談をしている。そんな二人を見ているとソリュシャンの胸は何故か温かい気持ちになった。自分の仕えるべき至高の御方が自分のことをこんなにも気にかけてくれているのだと……。

そう考えただけで嬉しくなってしまう。

へろへろと後輩の完成した喜びがアバターを伝わって、ソリュシャンにも届く。

ソリュシャンの喜びを知らない二人は、次々に設定などについて話

していく。

二人は一通り重要事項について話すと、別れの挨拶を済ませる。どうやら起動に満足して設定などは後日決めようということになったようだ。二人がともにログアウトする。

ソリユシヤンは至高の御方がいなくなることにさびしさを感じた。生まれたばかりのソリユシヤンはなぜ至高の御方が消えるのかは分からなかった。

それでもソリユシヤンは目覚めたこの時決意をした。

何があつても絶対に忠誠を尽くしていこうと。

それからは穏やかな毎日が過ぎていった。妹に当たる『シズ・デルタ』と『エントマ・ヴァシリツサ・ゼータ』それと『オーレオール・オメガ』が誕生したりもした。

アインズ・ウール・ゴウン攻略に大部隊が進行してきた時もあったが、それも見事に跳ね除けた。アインズ・ウール・ゴウンの名誉が増えるたびにソリユシヤンも胸を高鳴らせ喜んだものだった。

また至高の御方の会話からリアルという存在やその意味を知った。そんな中でソリユシヤンはただひたすらに出番を待つ暇な時間を過ごしていた。

暇な生活の中で一つソリユシヤンが楽しみにしている時間がある。それは初めて起動したときにヘロヘロの隣にいた『後輩』と呼ばれる亡霊が自分たちの様子を見に来てくれることだった。後輩はログインした時には必ずと言っていいほどにプレアデスの顔を見に行く。

基本的に玉座に留まるだけのプレアデスにとって至高の御方が直々に玉座に来ることは少ない。来たとしてもプレアデスにはあまり目もくれないで要件をすまして去ってしまう。それが寂しかったのだ。

決して長い時間ではないが自分たちの様子を見に来る後輩に、ソリユシヤンは魅かれていった。

ただし後輩からしたら手塩に掛けて作ったNPCを観賞するために来るだけなのだが……。

それでもプレアデス達からしたら嬉しかったのだ。

だがそんな満ち足りた生活にもいつかは終わりが来るものだ。

至高の御方がドンドンとナザリツクを去っていく。

ソリュシヤンは恐怖した。いつか自分を作ってくれたへ口へ口様ともうひとり『後輩』が来なくなることを。

そして遂にその時は来た。

後輩は最後にプレアデスを一目見た後、ナザリツクから消えて行った。

ソリュシヤンは悲しんだ。そして知ったのだ、失うことの辛さを、もう会えなくなることの悲しみを。

絶望した状態でも時間は過ぎていく。

ユグドラシル最終日に後輩は帰ってきた。

そして彼女達プレアデス一人一人に贈り物を下さった。労いの言葉も頂いた。

だが心から喜べない。何故なら本当の別れが迫ってきているのが分かったからだ。

ソリュシヤンは必死に願った

『行かないでください。至高の御方のためなら何だって致します。だからどうか、このナザリツクに残ってください』

そして奇跡は起きた。

アインズと後輩の二人がリアルへ帰ることが出来なくなったのだ。

NPC達は全員喜んだ。アインズがこの大墳墓に残ってくれると約束したからだ。ただ、後輩だけは煮え切らない態度をとったせいであインズとの間に確執ができてしまった。

人間の本質を残したまま転移し帰還を望む後輩と、異形種であることを受け入れ愛するナザリツクに残れる喜びに満ちたアインズとは決定的な溝が出来たのだ。

その溝はNPCとの間にも深まることになる



「まあ、いいわ、とりあえずアインズ様に報告してからにしましょう」

ソリュシヤンはそう告げると部屋を優雅に出ていく。

地を這いもがき苦しむ反逆者とはあまりにも対照的な姿だった。

ソリュシヤンの報告の任務は簡単なものだ。アインズの書斎まで行き、自分が今朝行つた懲罰と今日の意思確認を報告するだけである。そしてこれまでにアインズの望み通りの答えが報告されたことはまだ一度もない。それ故、この報告は半ば形式上の物だけになっていた。

それでも報告を怠らないのはアインズ直々の命令であるからだ。手を抜くことは出来ないし、プレアデス達は自らの望みのためにも反逆者の世話をする。

薄暗い廊下を抜けるように早歩きで歩を進める。

ソリュシヤンの美しい顔つきからはさつきまでの加虐的な笑みはなくなり、まるで人形のように表情が消え去っていた。

考えることは一つ。先程言われた軽蔑の言葉。それが彼女の胸に残り、抉り、侵していくのである。

(気持ち悪い……気持ち悪い……気持ち悪い……)

たった一言「気持ち悪い」と言われた。

ただそれだけのことでソリュシヤンの頭はグチャグチャになってしまった。

代わりに反逆者の顔をグチャグチャにしたが気分は悪くなる一方だ。

苛立っているのか、それとも悲しんでいるのか、どちらにせよソリュシヤンの心は大きく揺れ動いている。

今の彼は至高の41人でも何でもない。

ましてやナザリックの一員であるとも言えない。

そんな相手のたった一言の呟きにここまで動揺するなどは思ってもいなかった。

(……………)

ソリュシヤンはただ無心を心がける。

これから会うことになるアインズに対して無礼な態度をとらないようにするためということもあるが、何より自分自身が情けなく、そ

れでいてどこか惨めな気持ちになるようであったからだ。それだけは受け入れることは出来ない。

気付けばいつの間にかアイنزの書斎の前に着いていた。
「失礼します」

ソリュシャンはアイنزからの許しを得ると入室する。書斎の中ではアイنزが読書でもしていたのか読んでいた本にしおりを挟み机の上にそつと置く。アイنزにとってはこの一日一回の報告が日課になっているのかいつもよりゆったりとした態度でプレアデスに接していた。

アイنزは昨日や一昨日、それよりもっと前と同じ報告を聞く。至高の存在に戻らないという答えだ。

アイنزは「ふむ」と一言つぶやいた後、頭を下げ腕を組む。

プレアデス達は報告を聞いた後のこのアイنزが考えを走らせてる間が恐かった。

もしかしたら望む答えを引き出せなかった自分達が罰せられるかもしれないと思うからだ。しかし返答を待つより他は無かった。

アイنزは次に顔を上げるとソリュシャンの顔をじつと見る。

そして一言呟く。

「ソリュシャンよ、何か悩みでもあるのか？」

「……いえ、何も問題はありません」

あくまで平常心。あくまで冷静に。ただそれだけに徹する

これは自分の問題だ。至高の御方に余計な手間を取らせるわけにはいかない。

そんなソリュシャンを見透かすようにアイنزが話を続ける。

「私はお前たちのことを我が子のように思っている。だからこそお前が何かで悩んでいるのであれば力になりたいのだ。それとも私では力不足かな？」

「そんなことありません！……分かりました。実は——」

それからアイنزに対して事のあらましを説明する。

アイنز様は何も言わずただ純粹にソリュシャンの話に耳を傾けて聞いた、ソリュシャンはアイنزの慈悲深さに感謝しながら自分の

思いを話していく。

「それで『気持ち悪い』と言われてから頭の中がグチャグチャになってしまったんです」

最後まで話を聞いたアインズはソリュシヤンに寄り添いその骨の体で優しく抱きしめる。アインズの優しさがソリュシヤンに流れていく。

「それは辛かったな……。安心しろお前は気持ち悪くなどない。へろへろさんが作り出した最高のメイドだ。だから自信をもて」

「……はい………はい」

決して涙など流さない。異形種だから？違う。彼女は誇り高きプレアデスの一人だ。至高の御方の前で情けない姿を晒すことなど出来ない。

アインズの優しい抱擁にソリュシヤンも無言で抱き返す。ソリュシヤンはアインズに言われた言葉に励まされた。それと同時に心の中に痛みを感じていた。モモンガ様は私を最高のメイドだと評してくれた。それなのにあの反逆者は……私がどれだけ思おうとも反逆者にはその思いが一切伝わらないのである。

確かに苦痛と辱めを与えているのは事実だ、だがそれは彼自身のことを思っていることだ。現実なんかよりもここで至高の存在として君臨すれば良いというのに、その何が不満なのか。分からない。理解できない。

「アインズ様……私の思いは伝わるのでしょうか？」

「安心しろ後輩はやさしい奴だ。最終的にはみんなということが一番幸せであることに気付くはずだ。だがそれまではお前達プレアデスに辛い思いをさせてしまうことになる。そのことに関しては本当にすまない」

「構いません。例え嫌われることになったとしても私は……このナザリックに残ってくれるのなら何でもする覚悟です」

「ソリュシヤン……お前の忠誠嬉しく思う。では、早速業務に戻るのだ」

ソリュシヤンは深々とお辞儀をして部屋を出る。もう迷いはない。

自分の愛を苦痛に変えて反逆者にぶつけるのだ。そしていつの日にか受け入れてもらう。その時には絶対の忠誠を誓おう。

ソリュシャンは心を決めて再び地下牢への道を歩んでいくのだった。



顔面に蹴りを入れられたことで顔中血だらけだ。

さらに左腕はソリュシャンに捕食されてしまつて今でも左腕の断面から激痛が走る

視界は痛みで白と黒が交互にチカチカとしていて周りの状況が見えない。

俺はいま苦痛の中にいる。

そしてその苦痛は死よりも辛く、過酷だ。

「クソ！クソッ！なんで俺がこんなめに……クッ……！」

誰もいない部屋の中で必死に喚き散らす。喚くことで自身に降りかぶっている膨大なストレスがなくなっていくように感じるからだ。それでも痛みは容赦なく後輩の体を襲ってくる。何もできない。逃げることが、助けを求めることも。

後輩は絶望に耐える。モモンガ先輩は俺の心を完全に折り、プレアデス達の傀儡にさせるつもりだ。そんなことは認めない。最後まで抗うと決めている。

痛みに耐えながら仰向けになりうめいていると扉の方から声が聞こえてきた。

「だいぶ苦しんでいるようね……反逆者さん？」

「ソリュシャン……てめえのせいだろうが」

必死に睨みをきかせて威嚇するがソリュシャンはそれを意にも返さない。嫌われる覚悟できている彼女は立ち止まらない。

「そういえばそうでしたわ。あなたの左腕は最高に美味しかった……。まだ腕は一本のこっているわね……。そろそろそちらも頂こうかしら？」

「ふざけるな！やめろ！」

ソリュシャンはいつも通りの笑みを浮かべながら後輩に近づく。そして来ていたメイド服の上着をボタンを一つずつゆっくりと外していく。最後の一つを外しを得たところでソリュシャンの持つ豊かな乳房が後輩の前に曝け出される。

俺の顔は真っ青に変化し部屋の隅に逃げようとするが、残っていた右腕をソリュシャンに掴まれる。嫌だ、あんな苦痛をもう一度受けるなんて絶対に嫌だ！必死に掴まれた腕を引き離そうとするがソリュシャンの方が力が上なため全く離れる様子はない。

「嫌だ……やめろ……」

「二回目も耐えれたんだから、二回目もきつと耐えられるわよ。さあ、楽しませてちょうだい！」

ソリュシャンの露になった乳房に後輩の右腕がずぶずぶと沈んでいく。そしてすべてが浸かったところでゆっくりと濃度を上げ右腕をしわりじわりと溶かしていく。

「……………あああああああ!!」

最初は皮膚が溶けていく。じわりじわりと溶けていく。次に肉に到達するここが一番苦しいのだ。これまで使っていた右腕がなくなるのだ、精神的なショックと肉体的なショックの二つが同時に襲い掛かってくる。肉が赤い水に変化していく様子が目の前で流れているのだ衝撃は大きい。

最後に残った骨はしゃぶるように溶かしていく。断末魔は既に声が掠れうめくことしか出来なくなっていた。そして腕の断面を焼いた後、ソリュシャンは両腕を失くした俺を突き飛ばす。両腕のない俺は尻餅をつくように地面に倒れる。

「ああ、この味……やはりあなたの体はこれまでのどの人間よりも一番美味しいわ」

「うう……酷い………こんなの、酷いよお………」

思考が上手くまとまらない。喋る言葉はどこか幼稚さを感じられるものにすり替わっていた。それくらい辛かったのだ

「酷い？私達があなたに見捨てられた時はもっと辛かった！苦しかった

た！いつまでも至高の存在としていてくれると心から信じていたのに！あなたはその思いを裏切り、ナザリックすらも裏切った！だからもう二度と離れないようにたっぷりとその体に刻み込んであげる！苦痛をもつてね……………あらやだ……………ふふ……………本音が出てしまったわあ」

そして両足も次々に溶かしていった。俺は最早、痛みに叫ぶ力も残っていない。

両手両足を溶かされて最早、自力で動ける状態ではなくなった。

そんな俺の姿を見てソリュシャンはこれまでで一番の笑顔を俺に向ける。

「ふふ、可愛らしい姿ね。まるで、ぬいぐるみみたい。シズにあげたら喜ぶかしら？」

「はあ……………はあ……………」

「あら？もう言い返す気力もないのかしら？それにしてもあなた血だらけで少しみつももないわね。仕方ないからお風呂に入れてあげる」
そう言うともまるで赤子を抱えるようにソリュシャンが俺の体を抱える。まだ胸が丸出しなので隠して欲しいのだが。まあ、そんなことはさておきソリュシャンは俺を抱えたまま隣の浴室に向かう。浴槽には水が張られていた。

ああ、嫌な予感しかしない。

「大きく息を吸いなさい」

「なにを……………!!」

ドボンという大きな音を立てて四肢が溶かされた俺の体が水の中に落とされる。

急なことで息を止めることも出来ずそのまま沈んでいく。

手足がないため浴槽から出ることも出来ず溺れる。

そして段々と意識がなくなってきたギリギリを狙ってソリュシャンが俺を引き上げる。

口から水が噴水のように溢れ出てくる。力が抜けているからなのか涙や鼻水も流れていく。まさしく情けない顔をしていた。

「ふふ、とつてもいい顔……………顔まで食べちゃいたいけど、さすがにそれ

は死んじやうわよねえ……」

「ガハッ、ゲハッ……はあ、はあ……もう……やめ」

青白い顔をした俺の懇願を聞いたソリュシヤンは無言でニツコリ笑い再び冷たい水の張った浴槽に落とす。

そしてまた落としては引き上げる

それを何度も、何度も、何度も繰り返す。

頭の中はもう完全に真っ白で何も考えることが出来なくなっていた。

最後に引き上げた後ソリュシヤンは俺の濡れた顔と体を丁寧に拭きマジックアイテムを使つて手足を元通りにする。

あれだけ血反吐を吐くような苦痛を受けて失った手と足が、マジックアイテムを使つて一瞬で治つてしまう。こうしたナザリックの力を実感するたびに恐怖を抱いてしまう。

もうダメだ……意識が持たない……

「これだけ辛い思いをしてまだ意地を張るつもり？」

「……………」

「……ああ、疲れて寝てしまったのね。本当に可愛い。ずっと一緒にいたい。ずっと側にいて仕えたい。たとえあなたに気持ち悪がられても、たとえ嫌われていると分かっているとしても、あなたのために全てを捧げるから、だから、どこにも行かないで……」

そう言ってソリュシヤンは気絶した後輩に口づけをした。

金曜日 嘔吐のち膝枕

その日は酷く激しい雨が降っていた。

まるで白と黒の絵の具を混ぜ込んだような黒い雲の隙間から、ときおり雷が発する光と音が漏れ出ている。雷だけではない嵐が吹き荒れる音、空からももの凄い勢いで降る雨が地面に叩きつけられる音など、大地には自然の不協和音が溢れ出ている。

この一年に一度あるかないかの悪天候はこれから起こるであろう戦いを予感させていた。

ここナザリック大墳墓のロイヤルスイート内の一室では、後輩が自室の中にある物をかき集めていた。クローゼットの中の衣類も、集めていたポーションも、使わずにとつておいたマジックアイテムなども全部、無限の背負い袋やアイテムボックスの中に入れていく。

部屋の中はまるで泥棒でも入ったかのように物が散乱しているが、そんなことを気にする余裕は後輩にはない。とにかく少しでも多くの私物を持ち出そうと必死で、使えそうなものをかき集めている。

何故、後輩はこんなことをするのか？

理由は簡単。ナザリックが行って来た所業に耐えきれなくなり離反を決めたからだ。

最近のアイنزはおかしい。魔道国となり魔道王となつてからは特にだ。

菌向かう者は容赦なく粛清を行い、敵対する風潮のある組織には先制攻撃をしかけ、人間を使つた人体実験や、非人道的な虐殺など、日が経つに連れてその悪魔のような所業は酷くなつていった。

後輩は考える。モモンガは段々と人間であった時の心がすり減り、魔道王アイنز・ウール・ゴウンとしての人格が強くなつてきているのではないかと。

最初に転移した時にはまだ人間としてモモンガの人格は残っていたのだらう。情報収集のためとは言え虐殺が行われている村を助けに行つたりしていた。だが今では虐殺をする側に回り、全てを支配しナザリックの栄光を広めることに心を奪われてしまっている。

後輩はそれが何よりも辛かった。

もう殺すのも、殺されそうになるのも、両方に疲れた。全てが嫌になったのだ

後輩はアインズとは違い心の本質は変化していなかった。

それはカルマ値がマイナスでなかったことや、亡霊という種族が人間種に近いことなど様々な理由が重なったからである。だから悪にはなり切れなかった。

また異世界への認識の違いも離反の理由の一つだ。

モモンガの現実世界での境遇はユグドラシル時代に聞いたことがある。そのためこの異世界で、想像から実像になったナザリックと生きていくという判断を否定はしない。だが、後輩は違う。故郷に家族や友人を残しているのだ。帰らないわけにはいかなかった。

最初に転移した時に二人の意見は衝突し小さな軋轢を生んだ。だがその軋轢は段々と大きくなっていく。今では後輩に帰還の方法を探らせないために、NPCによる監視付きでナザリック内での業務を押し付けるなど行動を制限する半ば軟禁状態であった。

もう限界だった。

亡霊の体には心臓はない。だが心はある。その心が淀んでいくの感じていたのだ。

たとえ争うことになったとしても、自分の意思を曲げるつもりは毛頭なかった。

この命のやり取りが軽い異世界にも、人間を虫けらのように扱う異形種にも、くだらない戦争ばかりをする人間種にも、そしてそれら全てを見下し傲慢に振舞うナザリックにも、暗く深い嫌気が差したのだ。

私室ということで現在は監視はいない。無限の背負い袋に私室にあったアイテムをあるだけ詰めた。行く当てはないが、とりあえずはこの世界を旅しながら帰還の方法を探そう。

最後にナザリックを抜ける際に戦闘になることを見越してフル装備の状態になる。

出来れば争いたくはないのだが最悪の事態は想定しなければなら

ない。

私室から一気に<<上位転移>>を使い近くのトブの大森林に飛ぶ。

激しい雨が後輩の体に叩きつけられる。離反するには相応しい天候だ。そう思い灰色の世界の中をただ一人駆け抜けていく。

後輩のたった一人での反逆はこうして始まったのだった。



その日、魔導国魔導王「アインズ・ウール・ゴウン」は自室で一人事務仕事を淡々とこなしていた。魔道国が出来てからは仕事が山積みで中々部屋からは出れなくなっていた。聖王国や帝国、王国、法国など各国との国交や、ナザリック内の管理など仕事は山ほどある。デミウルゴスにぶん投げてもいいのだが、そこは魔道王としての威厳を示すために自分で出来る範囲は自分でやろうと決めていた。

こうしてアインズは忙しいながらも充実した日々を送っていたはずだった。しかし、現在の生活に満足している一方で不安なところもあった。それは同じギルメンの存在についてだ。

現在ナザリックには後輩と呼ばれているギルメンが一人在籍している。そのギルメンが現在のナザリックの状況をよく思っていないようなのだ。

自分と共に転移したギルメン「後輩」は意見の食い違いなどからいつナザリックを抜けてもおかしくない状態であった。そこでアインズは監視付きで大墳墓からださくないようにしているがいつまで従うかは分からない。アインズは常に監視の目を光らせていた

仕事を切りの良い所まで終わらせたところで大きく背伸びをする。オーバーロードである自分の体には肉はないのだが何となく肩が凝っているように感じる。

その時、急にメッセージより連絡が入る。相手はアルベドであった『アインズ様報告します！ただいま監視していた対象がナザリックを抜け逃走中。私室からはアイテムが持ち去られていることから離反

の可能性が強いかと』

その言葉を聞いた時にアインズの心は大きく揺れ動いた。いつか来るであろう恐れていたことが起きてしまったからだ。だがすぐに鎮静化により平常心を取り戻す。

「追跡はどうなっている？」

『つつがなく、ニグレド他索敵系の配下が追跡しております』

「わかった。いまから10分後に奇襲を仕掛ける。予想地点に転移門を発生させ私を含めた守護者全員で拘束する。他の守護者達にも装備を整えておくよう伝えろ」

『了解しました』

話を終えたアインズは大きくため息を吐きながら自らの準備に取り掛かる。洗脳されたシャルティアの時と同様に、決して負けてはならない戦いをしなくてはならない。

本当の幸せのためにも絶対に勝つ。

自分自身のためにも後輩のためにも。

俺は部屋の端にうずくまりながらソリュシャンから受けた仕打ちを必死に忘れようとする。昨日の攻めがこれまでで一番酷いやり方であった。考えれば考えるほど吐き気と頭痛が止まらない。

痛かった。苦しかった。辛かった。両腕両足が溶かされていく感覚が今でも脳裏にこびり付いている。その次の水責めだつて容赦というものが感じ取れなかった。

ソリュシャンは言った。

『いつまでも耐えられる訳ないじゃない』つと。その通りだ。こんなことがずっと続けられていくのならいつの日にか頭がおかしくなるだろう。

心が蝕まれていくのを感じる。殴られ溶かされ溺れていく内に心が病んでいくのだ。このままいけば壊れてしまう。

ならいつそ至高の存在に戻ったらどうか？それでもやはり変わら
ないだろう。一度逃がした鳥を再度逃がすほど先輩も馬鹿じゃない。
きつと今度はもつと嚴重に監禁されることだろう。

行き場のない怒りが叫びとなって声から漏れ出る。

「クソっ！何でっ！何でだよ！俺が何をしたっっていうんだよ！俺は
……俺はただ、帰りたかっただけなのに……うう……」

熱せられたように熱い怒りは、どうしようもない悲しみにより冷た
く冷やされ涙へと変わっていった。目からは大量の涙が堰を切った
ように溢れ出ていく。その瞬間、胃がキリキリと痛みはじめ急激な吐
き気を催す。

急いで便器のある方に向かいそこに向けて胃液だけの吐瀉物をこ
ぼしていく。

「ハア……ハア……」

気分が悪い。

もう嫌だ。

助けて。

「……大丈夫……大丈夫だからゆっくり息をして……」

平坦だが優しい声が後ろから聞こえる。

誰かが背中をさすってくれている。

視界がチカチカし始め、頭から血の気が引いていくのが分かる。ど
うやら貧血を起こしたらしい。立っていられなくなりその場に倒れ
かけるが背中をさすってくれていた誰かが体を支えてくれた。それ
を最後に俺の意識は瞬間的になくなった。

目を覚ました時に一番最初に見えたものは自分のことを無表情で
眺める『シズ・デルタ』の顔であった。体勢はどうやら膝枕をしてい
るらしく後頭部から柔らかい太ももの感触を布越しに感じる。

目が合って数秒経つがシズの方からは何も言っていないので、俺の
方から話しかける。

「シズ……俺はどうなったんだ？」

「……たぶん貧血だろうって……ナーベラルが言ってた……」

「ナーベラルも来てたのか？」

「…………そう…………一緒にお世話してもいい？って…………頼まれたから…………」

「そうか」

もしかしてナーベラルは前の時に嫉妬でボコボコにしたことを引きづっているのだろうか？まあ、どちらにしても今回の当番はシズがメインだから酷い目にあわされることはないと思う。いや、思いたい。

「それじゃあ、ナーベラルはどこに行ったんだ？」

「…………胃に優しい食べ物と薬を取りに行った」

あ、やっぱ前回のことを気にしてたんだな。

というかいつまでも膝枕の体勢じゃ恥ずかしい。シズも見下ろすようにして俺の顔をじつと見つめてくるし。

「あの…………もう起き上がれるようになったしき、だから膝枕はもういいよ」

そう言っただけ立ち上がろうとするが、シズは俺の頭を押さえて起き上がらせないようにする。シズも力をそこまで強く出してるわけではないが、腕と足をはやしたばかりでなおかつ体調が優れず力が出ないために簡単に力負けしてしまう。

「…………まだ、起き上がってはダメ…………もう少し休んでいて」

「はあ、それじゃあお言葉に甘えるか…………」

仕方なく膝枕の体勢のままであきらめてリラックスすることに専念する。

自動人形でも太ももは柔らかいんだなとしみじみ思う。

そのうちにシズは載せている俺の頭を柔らかい手つきで撫で始める。正直に言えばかなり恥ずかしいが、気持ちいいのも確かであるため受け入れる。

「……………」

シズの顔を横目で見ると無表情ながら以外にも少しだけ楽しそうだった。昨日の凄惨なお世話に対して今日のお世話はまさに天国だった。どうしてこうもNPCによって対応が違うのか。

俺はNPC達のことは嫌いではない。みんなで作り上げた子供た

ちのようなものだ。だけど今はその子供たちに嫌われている。俺が現実世界へ帰ろうとしたことでモモンガ先輩の意思に反した叛逆者になってしまったからだ。

そんな中でも一部のNPC達は好意的に接してくれている。それが不思議だった

「シズ、一つ聞いて良いか？」

「……………何？」

「どうしてシズは俺に優しいんだ？俺は叛逆者なのに……………」

シズは少しだけ口をへの字に曲げた後に答える。

「……………少なくとも……………私達プレアデスはあなたのことが好き……………でも、その愛の伝え方はバラバラだから……………私は……………優しくすること……………伝わると思う」

「そうか……………もし、俺がナザリックを去ったらどう思う？」

「……………考えたくもない」

シズの思いを聞くと俺自身が自分勝手な人間のように感じてくる。ナザリックを作った一人としてここに留まることが正解なのではないだろうか。責任を取ることが正しいのではないかと錯覚させられる。現実世界で俺の帰還を望んでくれる人がいる保証はない。

だが少なくともこの異世界では俺が留まることを望んでくれている人がいる。そう思うと至高の存在に戻らなければと感じてしまう。

……………ダメだ、絶対に帰るんだ。絶対に！

「シズ、薬と食べ物を持ってき……………」

俺が考えごとをしていると部屋にナーベラルが入ってくる。

シズに膝枕をされている俺を見て一瞬、動きが止まる。

ああ、クソまたこのパターンかよ。今回はルプスレギナが絡んでいないだけマシか。

「もう具合が良くなったようで良かったわ叛逆者、これなら少しぐらい殴られても平気そうね。それとも殴られるのが嫌なら蹴る方にしてみましょうか？」

俺は急いで立ち上がり後ろに引く。それに対して持っていたバスケットを床に置いたナーベラルがじりじりと迫ってくる。

「や、やめて」

「体だけじゃなく口の方も調子がいいみたいね。良い悲鳴を期待してるわ」

俺とナーベラルの間にシズが割って入ってくる。

「……落ち着いて、暴力は今日はダメ」

「……シズがそういうなら」

ナーベラルは可愛い妹に止められ引き下がる。

今日の当番はシズなために勝手に行動はできないのであろう。

今日はどうやら痛い思いをせずに済みそうだ。